

やまと 民俗への招待

先月末、薬師寺（奈良市）の花会式が満行を迎えた。堂内を莊厳する造花は寺近くの増田家と、市内の橋本家で作られる。いずれも薬師寺ゆかりの旧家だが、近年交流が途絶えていた。先月下旬、増田家の大学生の女性とその母親が橋本家を訪問、奈良に春を呼ぶ両家の交流が実現した。おなじ法会の花を作る者同士、すぐに親しく語らい、伝統を守る両家の歴史を感じた。

寺内で作られていた造花が両家の座敷で作られたようになつたのは明治から大正にかけてだという。橋本家は梅、山吹、椿、牡丹、藤、菊の6種、増田家は桃、桜、百合、杜若の4種を分担する。

花作りは根気のいる作業だ。前年の秋から紙を染め、型で打ち抜き、パーツ毎に作り上げて、2月上旬から組み立てに入る。葉には葉脈が再現され、花も、つぼみ、咲きかけ、満開の3段階を作る。つ



座敷に並べられた造花の前に座る橋本、増田の皆さん=奈良市で、藤山好典さん撮影

料のキハダを塗る。つばみを葉が包むさまを再現した「ダキアワセ」などもある。驚くばかりのリアルさを丁寧に追求して、精妙な花が再現され、仏前に献じられる。

花作りには、いろいろな小道具と技法が用いられる。その一つに葉や花びらに小さな波が立つようにする技法「シボル」がある。切り抜いた紙を重ねて、手拭いに挟んで片手で

押さえ絞るように成形する。野迫川村弓手原の正月行事「オコナイ」でも、紙の花を作る時にこのやり方を見たことがある。

この技法は橋本家で知ったが、増田家でも用いられているといふ。交流が途絶えていた両家で守られてきた花作りの技法。12世紀初めから始まったといふ花会式の花作りを通して、古い歴史と技術が伝播の世界が垣間見えてくる。

「春呼ぶ」両家の語らい

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)

||次回は5月11日